

「きりぎりす（蟋蟀）」の考察

『奈良帝御集』の和歌をめぐって

A STUDY OF THE “KIRIGIRISU(蟋蟀)”

Concerning one Waka Poem in “Nara Emperor's Songbook”

角田 宏子 芸術工学教育センター 非常勤講師

Hiroko SUMIDA Center for Art and Design Education, Adjunct Lecturer

要旨

「きりぎりす」を詠んだ平安時代の歌集『奈良帝御集』の歌を取り上げる。「きりぎりす」は日本においては、平安時代以降、「こおろぎ」と混同されてきた。歌詞としての「きりぎりす」は、中国語の「蟋蟀」の詩想を継承することが想定されるものの、日本の古代文学において、歌語と実態との関係は曖昧であった。また、日本に伝来当時、典拠となる漢詩の「蟋蟀」には類語が複数存在していた。中国語の「蟋蟀」が受容されて日本漢詩が作られ、「きりぎりす」を詠んだ和歌が作られる。それらの状況をふまえ、先行研究では「蟋蟀」（類語を含む）の受容については、漢詩文の影響、とくに白楽天の詩の影響下にあるという一律的な捉え方がなされてきた。本稿では、白楽天の詩には見られなかった、日本独自の空想の世界（「見立て」「あや」）が存在していたことを述べ、『奈良帝御集』における「きりぎりす」の歌を解釈したい。内容は次のとおりである。

- 1 『奈良帝御集』の一首
- 2 平安時代初期の「きりぎりす」
- 3 典拠となる漢詩文
- 4 実態と呼称
- 5 古代詩への影響
- 6 詩から和歌へ
- 7 結語

Summary

In this paper, I will take up a "Uta" about "Kirigirisu" from Heian Era (9th C., A.D.) songbook "Nara Emperor's Collection". That "Uta" means a Japanese classical poem ("Waka") consisting of 31 sounds. "Kirigirisu (grasshopper)" has been confused with "cricket" in Japanese classical literature. "Kirigirisu" as a song word inherits the imagination of Chinese poetry. Ancient Japanese poets accepted the Chinese "cricket: 蟋蟀", whose words and entity do not correspond. At the time of its introduction to Japan, there were multiple synonyms for the Chinese poetry word "蟋蟀". The Chinese "蟋蟀" was introduced to ancient Japan, and in response to that, quasi-Chinese poetry was made in Japan, and the Japanese "Uta" was made. In previous research, "Kirigirisu" has been uniformly understood to be under the influence of Chinese poetry, especially Bai Juyi's poetry. This paper organizes how Japanese poets accepted the Chinese word "蟋蟀", and present a fantasy world unique to Japan ("Mitate", "Aya") that was not found in Bai Juyi's poetry. Based on that, I would like to interpret the song "Kirigiris" in "Nara Emperor's Collection".

1 『奈良帝御集』の一首

ここに一首の歌がある。

きりぎりすのなくをきこしめして
きりぎりすつづりさせとぞ鳴めれど むらぎぬ
もたるわれはききおはず (『奈良帝御集』21)

(キリギリスが鳴くのを聞きになって／キリギリスは「ほころびを繕い縫え」と鳴くけれど、私は一むら(疋)の衣を持っているので、私に、その鳴き声はふさわしくない。)

平安時代半ば^{注1)}の私家集(『奈良帝御集』)に収録される歌である。詠作年代は、遡る可能性もある。

「きりぎりす」は、広く知られた鳴く虫である。夏から秋にかけて鳴く。上句「つづりさせとぞ鳴めれ」の「めれ」(ようだ)に、婉曲的な表現を用いる。「つづりさす」(綴り刺す)は繕い縫うという意味であり、キリギリスが、破れている物、すなわち綻びを「繕い縫え」と鳴くようだという。

この鳴き声については、平安時代末の歌学書『袖中抄』に考察がある。世俗に、キリギリスが「つづりさせかかはひろはん」と鳴くという言い伝えがあることを取り上げる。「かかは」は絹布で「やれて何にもすべくもなき」物とあるので、布くずのようなものだろう。「つづりさすには其かかはのおほくいでくる」ゆえであるという。きりぎりすのことを「させ」と呼んでいたらしいことも記されている。

『袖中抄』では、当歌を『家持集』にある歌として取り上げる。たしかに、『家持集』には、当歌を含むキリギリスの歌が、次のように歌群として載る。

きりぎりすわがやどちかくよるはなけ ひるは
さわがしものがたりせん (『家持集』252)
からころもたつたのやまにあやしくも つづり
させてふきりぎりすかな (『同』253)
きりぎりすつづりさせてふなくなれば むらぎ

ぬもたるわれはききいれず (『同』254)
きりぎりすわがきぬつづれ わびびとのやども
秋かぜよきずふきけり (『同』255)

「あやしくもつづりさせてふ」(不思議なことにも繕いをせよという)キリギリスの鳴き声を捉えた、当歌と同趣向の歌も見える。もっとも『袖中抄』では、当歌の「つづりさせ」という鳴き声の捉え方は、『古今集』の次の歌が元になっている(私案に、^{キリギリス}「葦」をさせと云事もなし。此つづりさせてふ^{キリギリス}「葦」なくと云歌につきて云にもやあらん。)と結論づけている。

秋風にほころびぬらしふぢばかま つづりさせ
てふ蟋蟀^{注2)}なく (『古今集』巻十九 1020)

これは、「寛平御時后宮歌合」に収録される在原棟梁の歌で、『古今集』に採録された。歌合は寛平元年から同五年(889年-893年)^{注3)}に開催されたものと伝えられるので、大伴家持の生存年とでは百年以上の開きがある。『家持集』自体が、「歴史上の人物としての大伴家持に關係する歌だけを集めた歌集ではなく、万葉集の作者不明歌」や時代の下る他人歌を含む(『新編国歌大観』解題)という不明確な要素を含む。

当歌が『家持集』の歌として認識されているということは、『袖中抄』の筆者藤原顕昭の時代に『奈良帝御集』に入るべき「奈良」の帝の歌としては伝わってなかったのかもしれない。

上の『古今集』歌では、フジバカマ(藤袴)が主体で、キリギリスは添えられた景物である。芳香を放ち、薄紫の色彩に加え綻びに似た形状が、顕昭の記す、絹布で「やれて何にもすべくもなき」物に似る。「つづりさせ」という鳴き声は、一首において添えられたものであるが、フジバカマの形態を効果的に表現している。

『袖中抄』『家持集』『奈良帝御集』所載の、現行の本文には次のような異同がある。

きりぎりすつづりさせとはなきをれどむらぎぬ

もたる我はききいれず (『袖中抄』)
 きりぎりすつづりさせてふなくなればむらぎぬ
 もたるわれはききいれず (『家持集』254)
 きりぎりすつづりさせとぞ鳴めれどむらぎぬも
 たるわれはききおはず (『奈良帝御集』21)

『袖中抄』は『家持集』の本文であるとして載せるが、現存の『家持集』の本文とは異なる。第三句について、「なきをれど」(袖中抄)は、「鳴いている」とキリギリスの鳴く状態を实景のように明確に示す。「なくなれば」(家持集)は、「鳴くようだ」と音をキリギリスの声であると推定する。さらに、「鳴くめれど」(奈良帝御集)になると、口語訳は「鳴くようだ」と同じながら、婉曲表現が意図される。

結句は、『奈良帝御集』のみ、「ききおはず」と異なる。「ききいれず」と比較して婉曲的にも見えるが、御製であることが意識されているようでもある。綻びであるか否かという問題を超えて、帝王である私には似つかわしくないという表現が意図されると解釈する。

一首の歌は、上のような和歌史的背景を有している。

2 平安時代初期の「きりぎりす」

先掲『奈良帝御集』一首の解釈は問題を残す。それは、平安時代初期の「きりぎりす」についてである。平安時代中期以降の「きりぎりす」が今のコオロギであることは、早くから指摘されてきた。霜の置く寒い季節を詠む歌に「きりぎりす」が見えるからである^{注4)}。その鳴き声が愛好されていることも、今のコオロギと同定される要因であったのだろう。また、今のコオロギと特定される「こほろぎ」が、文学作品に見えるのは、室町時代後期だったようで、御伽草子の例が挙がる^{注5)}。一方で、中古・中世の和歌に「こほろぎ」は詠まれなかった。和歌では「きりぎりす」の詞で今のコオロギが詠まれてきた。

では、『奈良帝御集』(あるいは『家持集』)の「きりぎりす」も同様に考えればよいか。

虫の実態が何かという考察も重要であるが、まずは、当「きりぎりす」が漢詩文の系譜にある言葉であると捉えた

い。作者は現実の「きりぎりす」の声を詠んでいるのではなく、あるいはそれを提示しようとしているのではなく、言葉の「あや」を詠む見立てをもとに作歌している。漢詩文の詩想を享受する時代の当歌であるが、先行する『万葉集』のそれよりも、漢詩文の影響を強く受けているように思われる。

『万葉集』において仮名で「きりぎりす」と表記する歌はない。『万葉集』には「蟋蟀・蟋」— 平安時代中期の辞書『倭名類聚抄』では「蟋蟀」を「木里木里須」と訓じる — の言葉が見えるのみである。『新編国歌大観』の『万葉集』で「蟋蟀・蟋」の語は、歌7首と題3の合計10箇所で使用されている。

その「蟋蟀(蟋)」を当時、何と訓じていたか。仮に「シツシュツ(シツ)」と読んでいたとする。漢語を用いる万葉歌人の間で、特定する虫の共通認識があったかどうかは分からない。伝来した漢詩文の中から「蟋蟀」という虫の呼称を見出し、付随する中国の典籍にも触れ、万葉の歌人は、生活圏にある秋の虫と結び付けたのだらうと思う。

『万葉集』に於ける「蟋蟀」の、歌での取り上げ方は、平安時代のそれに近いと言われる^{注6)}。つまり、虫の音に秋の興趣を感じ詠む。『万葉集』に於ける用例を掲げる。

秋風^ノ 寒吹^ナ奈倍^ヘ 吾屋^キ前^ノ之^ア 浅茅^サ之本^ノ尔^ニ 蟋蟀^セ鳴^ル
 毛^モ (『万葉集』卷十 2162 詠蟋蟀)
 庭草^ニ尔^ニ 村雨^{フリテ}落^テ而^シ 蟋蟀^ノ之^ハ 鳴音^ハ聞^ル者^ハ 秋^ヅ付^キ尔^ケ家^リ里^リ
 (『同』卷十 2164)

のように、秋の到来とともに鳴き、

影草^ノ乃^ハ 生有^{オヒタル}屋外^ノ之^ノ 暮陰^{ユフカゲ}尔^ニ 鳴蟋蟀^ハ者^ハ 雖聞^{キケド}不足^カ
 可^カ聞^カ (『同』卷十 2163)

と、鳴き声を聞いても飽きないという。夕暮れの庭で

暮月^{ユフ}夜^ノ 心毛^モ思^シ尔^ニ 白露^ノ乃^ハ 置^キ此^ニ庭^ノ原^ニ 蟋蟀^ハ鳴^ル毛^モ
 (『同』卷八 1556 湯原王蟋蟀歌一首)

「心もしのに」(しみじみと)虫が鳴く。

蟋蟀之 待飲 秋夜乎 寐 驗 無 枕 与 吾者
(『同』卷十 2268 寄蟋)

蟋蟀之 吾床隔尔 鳴乍本名 起居管 君尔恋尔
宿不勝尔
(『同』卷十 2314)

のように、虫たちが「待ち飲べる秋の夜」に対し、自分はそのようではないと詠い、虫の音が自分を眠れなくさせていると詠う。秋の虫に感じていた興味が、「蟋蟀」という言葉を与えられ、自在に詠めるようになったのであろう。

「きりぎりす」という和語が仮名で表記されるのは、現行のテキストでは「寛平御時后宮歌合」においてである。『万葉集』の成立以降、この間、文学史では国風暗黒時代とも呼ばれる「漢風讚美時代」^{注7)}が訪れる。「きりぎりす」は、移入された漢詩文の詩語と万葉の時代から続く生活圏での使用語彙とが統合され、文学用語として選別された詞となった。本稿の結論から述べれば、さらに「きりぎりす」と併せ詠まれる「つづりさせ」は、漢詩文に端を発しながらも日本的な受容が為された詞だといえる。以下、その様相について述べたい。

3 典拠となる漢詩文

和歌に限定しても、和語「きりぎりす」の典拠となったであろう漢語表記は複数存在する。

川上富吉「コホロギはキリギリス—万葉集「蟋蟀・蟋」考一」で典拠に挙がる漢詩文を元に、「蟋蟀」と関連する漢語の用例を、<表 1>に整理した。関連するとは、典拠となった漢詩文の本文および後世の注(註)において同義と見なされるという意味である。それらは舶載文書として伝来したらしい。漢詩文は『詩経』(毛詩)、『文選』、『玉台新詠』であって、春秋時代(紀元前5世紀)から六朝時代末(6世紀)にわたる。

この川上論では、「万葉集時代のとくに湯原王の周辺一つまり、万葉集編纂の有力候補である大伴家持も含めて一では、「蟋蟀・蟋」は、秋の虫を代表するもの」であったことが述べられている。

<表 1> 中国漢詩に於ける「蟋蟀」と関連語の用例

	出典
蟋蟀	『詩経』唐風 『詩経』邶風 『文選』卷二十九「古詩十九首」其十二 『文選』李善注(卷二十九「古詩十九首」其七) 『玉台新詠』卷一「雜詩九首」其二 『文選』卷三十三 文章篇「九辨五首」一 『玉台新詠』卷二「魏文帝於清河見輓船士新婚與妻別一首」 ※「與」字ママ 『玉台新詠』卷九「樂府燕歌行一首」
促織	『文選』卷二十九「古詩十九首」其七
趣織	『文選』李善注(卷二十九「古詩十九首」其七)
蜻蛚	『文選』李善注(卷三十三「文章篇」)
蜻蛚	

舶載文書を目にした、たとえば万葉時代の歌人は、どのようにこれらの詩ならびに詩にまつわる注を享受していたのか。まずは内容を確認したい。以下、本文については、私に書き下したのものや論文中のもの、書籍の転載が混在している。適宜断りたい^{注8)}。

中国の漢詩文で、「蟋蟀」は歳末の詩に詠まれてきたという注解を目にするが、厳密には正しくない。最古の用例である『詩経』には、本格的な秋の到来を示す景物の虫として詠まれる。

蟋蟀堂に在り、歳聿に其れ莫れん
今我楽まずんば、日月其れ除らん。
已だ大いに康む無かれ。職として其の居を思へ。
楽を好むも荒むこと無かれ。良士は瞿。
(『詩経』唐風「蟋蟀」)

「歳も暮れようとする」と詠むが、歳末ではなく、主意は、「蟋蟀」という虫が堂に近づく季節、すなわち「農事も畢って、暇の時になった」^{注9)}季節を示す。まだ寒くもない今に楽しまなければ、月日は過ぎ去ってしまう、しかし楽しみに溺れるな、というのが本章

の主意である。ここには第一章のみを掲げたが、詩は三章より成り、「蟋蟀在堂」の用語は、各章の冒頭に繰り返される。

同様に最古の例である『詩経』^{ヒン}豳風も、「日に改歳の為めに(日為改歳)」という表現で、歳末へ思いを馳せる。

五月に^{シシユウコ}斯螽股を動かす。六月に^{サカキ}莎雞羽を振ふ。
七月 野に在り、八月 宇に在り、
九月 戸に在り、十月には蟋蟀^{シヨウ}我牀下に入る。
^{キョウチツ}穹窒して鼠を薰じ、向を塞ぎ戸を^ス墮る。
^{アア}嗟 我が婦子、^{ココ}日に改歳の為に 此の室に入り
て^オ処れ (『詩経』^{ヒン}豳風「蟋蟀」)

「斯螽」「莎雞」「蟋蟀」という虫の名が見える。それらを「一物で時に随って変化し其の名を異にする」ものという注¹⁰⁾もあるが、「蟋蟀」は、「斯螽」「莎雞」とは区別され、七月から十月に蟋蟀が詠まれているように見える。折れ曲がる脚の姿態に着目される虫が^{シシユウ}「斯螽」、羽の姿態に着目される虫が^{サカキ}「莎雞」、さらに鳴き声に着目される虫が^{シシユウ}「蟋蟀」ということになる。

詩は男性なのか「老者」なのかの視点で、「我婦子」(嫁や子)に呼びかける。「隙間をふさいで鼠をいぶり出し、北窓をふさいで扉の編を塗」¹¹⁾り、寒さ対策をし「室」(部屋)で歳を迎えようという。そういった、来る寒さを想起させるのが、「蟋蟀」の移動である。七月には野で鳴いていたのが、八月には人家に近づき、九月には戸口に、十月には床の下にまで移動するというのである。ここで詠まれるのも、虫が寒さを避けて家屋に近づく、歳末に向かう時の推移である。

時代は下り6世紀、梁の時代に編纂されたという『文選』¹²⁾の、「古詩十九首」では、「蟋蟀」と同義であるという注の存在する「促織」が用いられる。詩では、季節の推移を示す一景物として「促織」が詠まれる。

明月^{キョウ}皎として夜光り、促織東壁に鳴く。
玉衡孟冬を指し、衆星何ぞ歴歴たる。

白露野草を^{ウルオ}沾し、時節^{タチマ}忽ち復た^{カフ}易る。
^{シユウセン}秋蟬樹間に鳴き、玄鳥^サ逝りて安くにか^{イズ}適く。

昔我が同門の友、高举して六^{カク}翮を振ふ。

手を携へし好^{ヨシミ}を念^{オモ}はず。我を^ス棄つること遺跡の^{ゴト}如し。南には^キ箕北には^ト斗有り。牽牛^{ケン}輓^{オク}を負はず。
^{マコト}良に盤石の固きこと無くんば、
虚名復た何の益かあらん。

(『文選』「古詩十九首」其七)

「立身した旧友の、今は誠意を失っているのを、星をかりて責めた詩」¹³⁾であるという。月が明るく光る夜なので、東の壁で鳴いている「促織」なる虫が見えたのであろう。作者の視点は、東壁から大空へ、そして露置く秋草の地面へ移り、樹間に「秋蟬」の声を聞く。大空に明るく列をなす星を思い、「箕・斗」が星の名に負う柄杓や箕の働きをしないことから、実を伴わない友への思いに移る。出世する同門の友は、友とは名ばかりで私を相手にしない、と詠む。この詩には、「促織」なる虫と「秋蟬」の虫の音が詠まれる。「秋蟬鳴樹間 玄鳥逝安適」(秋蟬は木々に鳴いているが、ツバメはどこかへ行ってしまった)というので、「促織」なる虫が鳴いているのは、まだ寒さを感じさせない秋の季節ということになる。

この詩には、次の注記が付されるという。

『春秋考』「異郵」曰く、立秋に^{シヨシヨク}趣織鳴く。宋均曰く、趣織は蟋蟀なり。立秋の女は功を急ぐ故に之を趣とす。『礼記』曰く、季夏の蟋蟀壁に在り。

本文の「促織」に対し、「趣織」「蟋蟀」は同義語であって、「趣織」と称するのは、「立秋の女」が機織りを急ぐからだという。『礼記』については、上のように、「季夏に」ではなく「季夏の」と読んだ。すなわち、立秋の語からすれば、夏の季節の「蟋蟀」が今は壁にいる、という意味であろう。歳末とは違い、初秋の詩であると、注記でも記されている。

また、『文選』文章篇では、「秋気」の中にある「蟋

蟀」が、人生の象徴のように詠まれる。

悲しいかな、秋の気^タ為るや。
 蕭瑟^{ショウセツ}として、草木^{ヨウラク}揺落して変衰す。
 僚僂^{リョウリウ}として、遠行に在りて、
 山に登り水に臨み、
 将^{マサ}に帰らんとするを送るが若し。
 沈寥^{ケツリョウ}として、天高くして気清く、
 寂寥^{セキリョウ}として、潦^{ロウ}を収めて水清し。
 僭^{ケン}棲^{セイ}として 増^{マスマス} 歎^{ススリナ}き、薄寒^{アタ} 之れ人に中る。
 愴^{ソウコウ}憤^{コウロウ}として、故を去りて新に就く。
 坎廩^{カンラン}として、貧士 職を失ひて、志平らかならず。
 廓落^{カクラク}として、羈旅^{キリョ}にして 友生^{ユウセイ}無し。
 惆悵^{チュウチャウ}として、而^{シコ}うして私^{ヒンカ}に自ら憐れむ。
 燕^{ヘンベン}は翩翻として其れ辞し帰り、
 蝉^{セキバク}は寂寞として聲無し。
 鴈^{ヨウヨウ}は靡靡として南遊し、
 鷓鴣^{コンケイ トウタツ}は啁啾として悲鳴す。
 独^{シントウ}り申^イ且して寐ねられず。
 蟋蟀の宵^ユ征^{セイ}くを哀しむ。
 時は疊^{ヒト}として中^アと過ぎ、蹇^{エンリョウ} 淹留^{エンリョウ}して成る無し。
 (『文選』「九辨五首」一)

この詩は、屈原の弟子とされる宋玉が作者であるという。上に掲げた箇所は、「宋玉が屈原の立場に立って述べた」^{注14)}五首の第一首目に当たる。五首全体は、不遇を嘆く詩であり、第一首目は、その心情を象徴するような、秋の感興で、まさに「悲しいかな。秋の気たるや。」と詠い出される。哀しいのはまず「秋の気」である。遙かな旅路を行く人を送る時の山から見下ろす景色、広々と高い天の清澄な空気、清らかな水を感じ、「薄寒」が身にしむという。

職を失った貧士は旅路にあり、友もない。燕はひらひらと飛んで帰り、蝉は鳴き声を立てない。雁は南にやって来て、大きな鷓鴣が激しく鳴き立てている。独り朝まで寝られない。その後に登場するのが「蟋蟀」である。「蟋蟀の宵征^ユくを哀しむ」という。時は過ぎ、

中年となるが、とどこおる人生は何をも成しえていない、と結ばれる。移動する「蟋蟀」なる虫の音も聞こえているのだろうが、場所を変えて鳴く蟋蟀は、過ぎ行く時の象徴として、「時^{ヒト}疊^{ヒト}過中」の句を導いている。この本文に対し、次の注が付される。

蜻蛉^{セイレイ}の夜行くを見、虫とともに放棄せられ^{セキ}隻と為るを自ら傷むなり。或日の宵^ユ征^{セイ}く。七月野に在り、八月宇に在り、九月戸に在り、十月蟋蟀我が^{ショウ}牀下に入ると謂ふ。是れ其の宵^ユに征^{セイ}き行くなり。

「蜻蛉^{セイレイ}」と「蟋蟀」が同義に用いられている。後半に記されるのは、先の『詩経』「邕風」の引用であり、時の移ろいととも虫が居場所を変える例として挙がる。前半は、「放棄」せられ一人になった哀しみを言う。「放棄」は、人との関係が絶たれた哀しみであり、宋玉の第一章で言えば、澄んだ秋の気の下、馴染みの土地からも人からも離れた、不遇で孤独な我が身の姿である。

『文選』では、『詩経』の詩「蟋蟀」が、すでに詩作の典拠となっている。詩は後半の、燕・趙^{エン・チョウ}の佳人への思いに続くが、ここでは前半のみを掲げる。

東城高く^カ且つ長く、逶迤^{イイ}として^{オノズカ}自^{オノ}ら相属す。
 廻風^{カイフウ} 地を動かして起り、
 秋草^{セイ}萋^{セイ}として^{スデ}已に緑なり。
 四時^{シイジ}更々変化し、歳暮^{セイボ}一に何ぞ速やかなる。
 晨風^{シンブウ}苦心を懐き、蟋蟀^{キョクソフ}局促を傷む。
 蕩滌^{トウテキ}して情志を^{ホシイママ}放^{ホシ}にせん。何^{ナンス}為れぞ^{ミズカ}自ら結束す。

(『文選』「古詩十九首」其十二)

「歳月の過ぎ易いことを嘆じて、行楽をほしいままにしようとの意を述べた」^{注15)}詩であるという。高く長く続く東の城壁に、秋風が草を揺らして舞い上がる。地面はもうすっかり秋草が茂り、季節の移り変わりを

改めて感じる。「晨風」^{シンブウ}「蟋蟀」の詩はあるが、自分は、「苦心」「局促」とは無縁に、心を縛る(自結束)ことはない、という。

ここでの「蟋蟀」は、「晨風」とともに『詩経』の詩を指し、次の注では、それが諷諭であることを説く。

『毛詩』曰く鳩^{イツ}は彼れ晨風^{シンブウ}、彼北林^{ムレ}に鬱る。未だ君子を見ず。憂^{ケンケン}ふ心^{ソウケツ}欽欽。「蒼頡篇」曰く、懷は抱なり。『毛詩』序曰く、蟋蟀^キ俛にして、晋の僖公俛にして礼に中らざるを刺る。『漢書』「景帝」曰く、局促^{キョクソク}轅下^{エンカ}の駒^{ナラ}に効ふ。

「晨風」の苦心、「蟋蟀」の局促については、「「晨風」には見棄てられた臣の苦愁をいづく意があり、「蟋蟀」には儉約に過ぎるのをそしって、身のゆきつまりをなげく意があるが^{注16)}」と口語訳されている。

『詩経』唐風「蟋蟀」は、「好楽無荒 良士^{リョウシ}瞿瞿」(第一章)、「好楽無荒 良士^{ケツケツ}蹶蹶」(第二章)、「好楽無荒 良士休休」(第三章)、で結ばれ、「良士」すなわち、すぐれた人物(賢士)のあるべき姿が示されていた。「瞿瞿」(慎みをもつ)、「蹶蹶」(敏速に行動する)、「休休」(道を楽しみ安らかである^{注17)})として、楽しみに溺れないという詩であった。

その『詩経』唐風の「蟋蟀」に対して、当詩の「傷局促」では、良士の才能を伸ばし得ないことを嘆くと捉えられている。蟋蟀に関しては、蟋蟀が主体的に何かをするわけではないが、つつましいものと見られている。それに比して、つつましくしても晋の僖公は「礼」に当たらない、という解釈がすでに生じていた。

さらに6、7世紀頃の『玉台新詠』では、三例に「蟋蟀」が見えるという^{注18)}。

『玉台新詠』^{注19)} 卷一「雑詩九首」其の二は、先掲『文選』「古詩十九首」其十二と同じである。次の卷二「於清河見輓船士新婚妻別一首」(清河に於いて船を輓く^ヒの士、新たに婚し、妻と別るに見ふ一首)も、時の推移を提示する景物として「蟋蟀」を掲げる。

君と新婚を結び、宿昔^{シユクセキマサ}當に別離すべし。

涼風秋草を動かし、蟋蟀^ア鳴いて相隨ふ。

冽冽^{レツレツ}寒蟬^{カンセン}吟じ、蟬吟じて^コ枯枝^{コシ}を抱く。

枯枝時に^{ヒヨウ}飛揚す、身体^{タチマ}忽ち遷移す。

身の遷移するを悲しまず、

但^{タダ}歲月の馳するを惜しむ。

歲月窮極無し、会合^{イスク}安んぞ知る^ベ可けん。

願はくは^{ソウヨウヨク}雙黄鵠^ナと為りて、翼^{ナラ}を比べて清池に戯れんことを。

(『玉台新詠』卷二「於清河見輓船士新婚妻別一首」魏文帝)

題に、清河(河北省)で船を引く男が、新婚の妻と別れねばならないという状況を見て、作者である魏文帝が詠んだ、とある。新婚の妻と、しばらく(宿昔)離れねばならなくなった。涼しい風が秋草に吹き、蟋蟀が鳴いている。冷やかな冷気の中で蟬が鳴いている。吹く風に、蟬は枯れ枝にしがみつくものの、枯れ枝が風に飛ばされる。それを見て、妻から離れ行く自らを想起する。悲しいのは今、身体が離れることではないという。

月日が過ぎ去ることで、際限なく過ぎ去る月日に、自分は何時帰れるのかという。そして、つがいの黄鵠になり、清池で羽を並べていたいと結ぶ。新婚の妻と別れねばならない夫の目に映るつがいは、黄鵠だけではない。「蟋蟀」もまた、つがいで鳴いているのである(蟋蟀鳴相従)。つがいの蟋蟀であれば、これまでに見なかった詠み方ではあるが、ここでも、根底にあるのは、時の移ろいを実感させる虫であるところの、蟋蟀なる虫である。

『玉台新詠』卷九「樂府燕歌行一首」は、作者の陸機が、遠く離れた夫を思う女性の心情を詠んだ詩である。四季は順番に移り変わってゆき、過ぎ去った季節には追いつけない。寒い風にひらひらと落ち葉が舞う。蟋蟀が堂にいて、堂に上る階段は露で満ちる。「四時^{シイジ}代序^{ダイジョ}して^ユ逝いて追はず、寒風習習 落葉飛ぶ。蟋蟀堂に在り、露階に^ミ盈つ。」と詠い出される。当詩でも、『詩

経』の詩「蟋蟀」を踏まえる。

『玉台新詠』では、広義の空閨、孤閨の景物に「蟋蟀」が詠まれる。蟋蟀はつがいではない。日没後に林に棲む「匹鳥」と、『詩経』の詩を踏まえた「双鳩」が独りの女性と対比される。遠く離れた夫を思う妻が、詩の中で詠うのは「時」である。時の規則正しさに伴い秋が来て蟋蟀が鳴く。一日も規則正しく暮れ、別れた日も過ぎ去っていく。しかし、会える日は早くは来ないという心情が背景にある。

川上論が指摘する出典に沿って見てきたが、それらが、日本に於ける上代詩の「蟋蟀」の典拠となった。蟋蟀は、「堂に在」る蟋蟀として、本格的な秋の景物として詠まれるとともに、時の移ろいの早さを示す景物でもあり、人生の悲哀や空閨の景物として詠まれた。そして、諷諭としての解釈も存在していた。

4 実態と呼称

平安時代中期成立の辞書『倭名類聚抄』(和名抄)^{注20)}は[]の項目に対し、次のような内容を記す。

[蟋蟀] 蟋蟀(『和名抄』所引『兼名苑』)
一名 蜚、和名 木里木里須

[促織] 絡緯(『和名抄』所引『兼名苑』)
一名 促織、和名 波太於里米
鳴聲如急織機故以名之

[蜻蛉] 蜻蛉(『和名抄』所引『文字集略』)
和名 古保呂木

中国の漢詩文より得た言葉と、生活圏で馴染み深い言葉との照合が行われ、「和名」となったのであろう。

実態と呼称に関する論考では、新井白石『東雅』が漢詩文に言及している。「古今の語、方俗の言、相混じて分ち難し。漢人の説の如きも、亦これにおなじかりけり。」で始まるが、すでに「蟋蟀キリギリス・促織ハタオリメ・蜻蛉コホロギ」を整理し項目が立てられ

ている。日本と中国の視点を分け、日本側の視点では『和名抄』を取り上げ、漢籍でも『爾雅』『方言』はもとより「陸機詩疏 朱子詩経 通雅正字通 皆同じ」く「蟋蟀即促織亦名蜻蛉 一名蜚」であるとし、典拠となるはずの漢籍においても「相混」する様を示す。そして、実態と名称についての混乱には、それぞれの風俗による呼称の差異に加え、類概念、種概念の捉え方が関係していることを示す。「漢字に執すまじき事なり」としながら、仮に漢字をもとに実態を考えるなら次のようであることが示される。同書の記述を<表2>にまとめた。

<表2>『東雅』に於ける「蟋蟀」と関連語の記述

記載語 典拠	新井白石による補記
(1) 蟋蟀 [毛詩 爾雅 方言]	
蜚 促織 蜻蛉	皆一物にして、古にコホロギといひ、今はイトボといふ者也。
蟋蟀似蝗而小、正黒有光澤如漆、有角翅、一名蜚一名蜻蛉、楚人謂之王孫、邇州人謂之趨織、里語曰、趨織鳴、嬾婦驚。 (陸機詩疏)	古にコホロギといひ、今イトドといふ者に、此物は蠨蝮 俗に搜夾子といひ、此にハサミムシといふ者の化れるなり。
(2) 蝻斯 [毛詩]	
蝗之類也。長而面青、長角長股、以股鳴者也。或謂似蝗而小。斑黒、其股似瑋瑁、又五月中。以兩股、相切作 声、聞數十步。 (陸機疏)	古にはハタオリメと云ひしを、今はキリギリスといひ、古にキリギリスと云しを、今はコホロギといふ、即是也。
□ 蝻 (正字通) ※□判読不能「阜」カ	其類殊に多かり、それが中に古にはハタオリメといひしを、

大小不一、長角修股、 善跳躍、有青黒斑数色。 (総名)	今はキリギリスとい ひ、古にキリギリスと いひしを今はコホロ ギといふ。皆其類にし て、股鳴者也。
(3) 莎雞 [毛詩]	
有青褐兩種。 (羅願爾雅翼)	其青なるものは、此に いふ松虫也。其褐なる ものは、此にいふ鈴虫 也。其義並 不詳。
莎雞 [爾雅翼]	
其羽昼合不鳴、夜則氣 從背出、吹其羽、振々 然。其声有上有下。正 似緯車。故今人呼為絡 緯者。 (丘光庭が兼明書)	俗に金鐘児 月鈴児 などいふ類。此にマ ツムシ・スズムシなど いふ。皆 其類にして、 翅鳴者也。ハタオリメ とは機織女也。其余は 詳 らず。

漢籍に於ける混乱の根拠が示される。実態への言及は、<表 2>左側の引用に拠り、資料には、唐代の『兼明書』や宋代の『爾雅翼』といった注釈も含んでいる。

『毛詩』記載の「蟋蟀」(1)は、「蚕・促織・蜻蛉」とも表記されるが、その実態は同一で、「コホロギ(イトド)」と呼ばれると補記する。これは、陸機の注では、次のように記されるという注²¹⁾。

蟋蟀は蝗に似て小さく、真っ黒で漆のような光沢がある。四角い羽があり「蚕」「蜻蛉」とも呼ばれる。楚人はこれを「王孫」と言い、隴州の人はこれを「趨織」という。世間では、趨織が鳴くと怠け者の婦人が驚くと言われている。

(『東雅』所引『陸機詩疏』)

地方による呼称の違いが書かれているが、いわゆる今のコホロギの形態的な特徴が記される。この虫が鳴

くと怠け者の婦人が、冬支度に焦り、はっと(驚)する。

一方、『毛詩』記載の「蠹斯」(2)には、次の注が引用される。

蠹(イナゴ)の類である。長い体は青く、長い角、長い脚をし、脚で鳴き声をたてる。あるいは、蝗に似ているが蝗よりも小さいという。黒い斑模様があり、その脚は瑇瑁に似る。五月には両足を擦り合わせるようにして鳴き声を立て、その声は数十歩先でも聞こえる。(『同』所引『陸機疏』)

そして、「蠹斯」には、大きさは大小定まっておらず、長い角と長い脚を持ち、よく跳びはね、青黒い斑点が幾つかあるという。『正字通』の「口蠹」の口は、活字の判別が不能であるが「阜」の旧字で、「阜蠹」かもしれない。古くは「ハタオリメ」今は「キリギリス」と呼ばれるという関係は、先にも述べられていた。キリギリスは羽をすり合わせて鳴くようであるが、脚の辺りで音を出すという意味であろうか、「股鳴」と補記されている。

さらに「莎雞」(3)については、青色と褐色の二種類がいる(『爾雅翼』)という。補記では、青色のものが今日の松虫で、褐色のものが鈴虫かと記す。そして、同『爾雅翼』に引用されていたという『兼明書』の記載が、次のように記される。

昼間、その翅は閉じ合わされていて鳴かない。夜に背より空気を出し、羽を吹き上げさかんに振る。その声は高く低く、まさに緯車のような。ゆえに、今の人は、「絡緯」を為しているという。

(『同』所引『兼明書』)

夜になると羽を広げて振るわせる。その鳴き声は音の高さが上下し、緯車(いとぐるま)のようであるという。したがって人々が「絡緯」(糸車を回)しているようだと言っている、と記される。この虫は、「金鐘児」

「月鈴児」などという類の、今のマツムシ・スズムシで、^{ハネ}翅で鳴き声を立てるといふ。「ハタオリメ」とは「^{ハタオリメ}機織女」であろうが詳しくは分からないと補記されている。

すなわち、古典的な漢籍の用語と実態との関連で言えば、次のような対応関係になるという。

^{シツシュツ}蟋蟀 (古い呼称: キリギリス) 今のコオロギ
^{シユウシ}蝻斯 (古い呼称: ハタオリメ) 今のキリギリス
^{サケイ}莎雞 (一) 今の松虫または鈴虫

古い呼称で「キリギリス」と呼ばれていた虫の実態は、今のコオロギということになるが、実態として今の「キリギリス」に相当する虫は、古い呼称では「ハタオリメ」と呼ばれていた虫であると記される。

新井白石『東雅』の記載に関し、「^{サケイ}莎雞」については、異なる見解があるようである。『東雅』では、「^{サケイ}莎雞」をマツムシまたはスズムシと注解しているが、それとは異なる見解である。『詩経』に関する次の論考では、「^{サケイ}莎雞」を今のクツワムシと同定される。

同論では、「^{シシユウ}斯蝻・^{シツシュツ}蟋蟀・^{サケイ}莎雞」を「一物」とする朱子の注が存在する一方で、実態の異なる虫と見る陸機の注があり、混同があったことが述べられ、とくに「^{シツシュツ}蟋蟀」と「^{サケイ}莎雞」との混同の項目で次のように記される。

蟋蟀はコオロギ科の各種を指すようであるが、特に中国で普通種の *Cryllulus chinensis* に当てられている。これは体長が一三〜一六ミリで、全身が黒色で光沢があり、褐色の剛毛がある（『中葉大辞典』）。鳴き声は「リリリリ」という連続した四音節だといふ（『辞海』生物分冊）。周堯によれば、戦闘の上手な *Scapsipedus aspersus* のほかに、キリギリス科の聒聒児 (*Mecopoda elongata*)、また油葫蘆、椰子頭、金鐘児など数十種以上が蟋蟀に含まれるとする。(中略) ^{サケイ}莎雞は右に出た聒聒児、つまりクツワムシの呼称である。

陸機の記述の中で、斑紋があるというのは当たっているが、色は褐色型と緑色型とがあつて、正赤ではない。しかし索々という音色はクツワムシの^{チャーチチャーチ}軋積軋積という音（『辞海』）と似ている。

(加納喜光「詩経の博物学的研究(2) 一虫の博物誌(承前)」)

今のコオロギである「^{シツシュツ}蟋蟀」と今のクツワムシである「^{サケイ}莎雞」が混同または同一視されるに至るのは、それぞれの異名が原因であったといふ。つまり、ともに

^{サケイ}莎雞の異名 紡績娘、紡線娘、絡緯、絡糸娘
^{シツシュツ}蟋蟀の異名 促織 (^{ソクシヨク}趨織・趣織)

のように機織りに関連した異名があり、「言葉の類似に由り促織と絡緯を同一視した形跡がうかがえる」といふ。

ここで着目したいのは、異名に見える時期的な差である。糸を紡ぐ意味に由来する語と、機織りに関する語に分かれ、後者には「織」を用いている。時期的には当然、紡績が先行し機織りは後である。対応する虫の鳴く時期も、「^{サケイ}莎雞」の後に「^{シツシュツ}蟋蟀」が鳴くことになる。これは、『詩経』「唐風」に詠まれていた内容と同じである。同論では、音声に由来する説を提示し、『古今注』ならびに『爾雅翼』を次のように紹介する。

『古今注』では「促織の鳴き声は急いで織るようで、絡緯の鳴き声は紡績のようだ」とあり、促織も絡緯と同様に音声に由来すると見なした。下って宋の羅願は、促織は急に織るようだから促織といい、またそれが鳴く時は紡績の候である。絡緯は紡糸の音のようだから梭(=莎)雞といい、絡糸の時候に当たっていると述べ、両案を折衷させた（『爾雅翼』）。 (「同上論」)

さらに日本で、促織が「はたおりめ」（『和名抄』）と読まれたことについて、次のように述べる。

杵声)。当詩に見える「絡緯」は、『玉台新詠』「^{ガフエン}樂府燕歌行一首」の「^{カコウ}蟋蟀」同様、遠く離れた夫を思う妻の悲しみを増幅させる景物である。

『文華秀麗集』には、また、菅原清公の「賦して「^{ラクイ}絡緯機無し」を得たり。応製。一首。」の詩が見える。同様に夫と離れた妻の心情を詠む。

^{サイボ ショウロウ}歳暮の倡楼冷やかにして、^{セイフ マレ}征夫の消息希らなり。
^{シチュウナン オモイ}思虫寧ぞ憶有らむや、誰がためにか寒衣を織る。
^{サイイ チョ}細緯元より杼なく、^{ソケイ キ}疎経機を待たず。^{キヌ}足成りて如し借るべくは、遠く送りて^{キンビ}金微に寄せむ。

(『文華秀麗集』「賦得絡緯無機。応製一首。」菅清公 136)

この詩の題には「絡緯」、本文には「思虫」の語が見える。年末に女性のいる建物は冷ややかで、夫からの消息はない。「思虫」は何を思い、誰のために冬支度の衣を織るのか。虫の用いる縦糸は細く、もとより杼は不要で、粗い横糸には機も要らないはずである。一疋の布が織れて、もし借りることができるなら、遠く金微山にいる夫に届けたい。そのように女性の心情を詠む。

題は、「絡緯に機が無い」というテーマで詠んだ詩であることを示す。蟋蟀に「^{ソクシヨク}促織」という異名のあることが、『文選』「古詩十九首」其七に見え、同注が引用する『春秋考』には「^{シヨシヨク}趣織」も「蟋蟀」と同義であることが記されていた。「促織」は文字どおり、秋になり冬支度の衣を織る意味が原義であり、「趣織」も同類と見なされたのであろう。それを、糸にまつわる「^{ラクイ}絡緯」の語で、受容した。のみならず、「^{ラクイハタナン}絡緯機無」の詩想を、それはどうということなのかと言及し敷衍している。

『懷風藻』(751年成立)に、「蟋蟀」に類する語の用例は見えない。しかし、山が機となって黄葉を織りなすという見立ては、大津皇子の詩に「^{ハク}山機霜杼織葉錦」として見える。『万葉集』には同詩人の和歌「^{タテモ}経毛無 ^{ナク}緯毛不定 ^{ヌキモサダメズ}未通女等之 ^{ヲトメラガ}織黄葉尔 ^{オレル}霜莫零」(巻八 1516)が載る。

奈良時代の『懷風藻』、そして平安時代初頭の勅撰詩集であるところの『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』のうち、最後の『経国集』(827年成立)には、「蟋蟀」に類する語の用例が、三例見える。まず、良岑安世「重陽の節神泉苑に秋哀しむべきを賦し、制に应ず」(巻一)注27の詩に、「^{シツシュツ}蟋蟀吟じて壁幽寂たり。^{センチュウ}蟬蛸鳴いて野^{ソウボウ}蒼茫たり。」の句がある。秋が深まるにつれて移動し、「堂に在り」(『詩経』唐風)、「東壁に鳴く」(『文選』古詩十九首・其七)蟋蟀を踏まえたものである。

二例目は、同題(巻一)で、和気仲世が作者の「^{シチュウ}思虫、晩織るに苦しみ、旅雁路の難きに倦む。」という句である。労役のため遠い所にいる夫を思う女性の心情が、「思虫」と旅雁とに投影される。「思虫」が、晩に機を織るのに苦しうで(思虫苦於晩織)、飛んでいく雁が、帰り道の遠いのに疲れている(旅雁倦於路難)という。この「思虫」も『文華秀麗集』に見たように、「蟋蟀」と同義で用いられる。

三例目は、滋野貞主「七言。秋月の夜一首。」(巻十四)に見える「^{キチヨ}暗織昆虫機杼の悲しみ」の句である。「^{ナシ}那ぞ堪へん秋夜暗闇の中」で結ばれる当詩もまた、女性の立場に立った詩で、空闇が詠まれる。「暗い夜に虫が機を織る、^{キチヨ}機杼の悲しみ」とは、女性の心情を仮託したものであり、「^{ナン オモイ}思虫寧ぞ憶有らむや、誰がためにか寒衣を織る。^{サイイ}細緯元より杼なく、^{ソケイ}疎経機を待たず。」(『文華秀麗集』「賦得絡緯無機。応製。一首。」菅清公)と同様の趣向であらう。

以上の漢詩集に於ける「蟋蟀」(類語を含む)の用例を取り出し整理すると、次の<表3>のようになる。

<表3>古代漢詩集に於ける「蟋蟀」の用例

	作者	出典
蟋蟀	嵯峨天皇	『凌雲集』重陽節神泉苑同賦三秋大有年。題中取韻。大韻成篇。
絡緯	嵯峨天皇	『文華秀麗集』和內史貞主秋月歌(巻下 雜詠 137)
絡緯 思虫	菅清公	『文華秀麗集』賦得絡緯無機。応製。一首。(同 136)

蟋蟀	良安世	『経国集』重陽節神泉苑賦秋可哀 応制 (巻第一)
思虫	和仲世	『経国集』重陽節神泉苑賦秋可哀 応制 (同上)
昆虫 ※	滋貞主	『経国集』七言。秋月夜一首。 (巻第十四) ※「暗織昆虫機杼悲」

6 詩から和歌へ

「蟋蟀」は、「平安人の悲哀の認識」^{注28)}の影響下に詠まれ、白居易の影響を経て、その詩想を継承するものと捉えられてきた。まとまった『白氏文集』の伝来は承和五年(838年)^{注29)}のことであり、この仁明承和期に、中唐白居易(白楽天)の詩の享受が著しくなるという。『万葉集』で詠まれなかった「壁」の辺りで鳴く「蟋蟀」が詠まれることが指摘されている^{注30)}。

たしかに『新撰万葉集』「秋歌三十六首」の漢詩に、「^{キョウ}蚕」が見える。壁に流れるような声で鳴き(壁蚕流音数処鳴『新撰万葉集』86)、壁の下で、高い声、低い声で鳴き(蟋蟀高低壁下鳴『同』90)、家々の壁で乱れるように鳴き始める(壁蚕家家音始乱『同』126)。壁で鳴くその虫の音が意図するのは、秋という季節の到来である。『万葉集』には見られないと指摘されていた、漢詩文に於ける「蟋蟀」の「壁に鳴く」姿が詠まれている。白居易の詩(白詩)の影響は、平安時代の漢詩文にも及ぶという。

平安時代後期の漢詩集『本朝無題詩』でも、「蟋蟀」に類する虫は、次のような詩句に見える。

^{サケイノヨエン}沙雞餘怨 (113「秋夜宿野亭。于時晴天晴月明。

終夜不眠。鴻雁叫天。蟋蟀吟床。」藤原周光)

^{クサヲオルアンチュウ}織草暗虫 (282 藤原季綱)

^{イトヲユウムシハラム}絡糸怨虫 (287「九日即時」源経信)

^{カンチュウニナミダハウルオイヤスシ}寒虫涙易霑 (294 藤原季綱)

^{チュウシハクサヲオリテ}虫糸織草 (462「野天秋興」釈蓮禅)

(『本朝無題詩』^{注31)})

先行研究は、上記の作品に白詩の影響を説く。たとえば、釈蓮禅の用例「虫糸織草」の注釈に、

ハタオリ(促織。ギリギリスの古名)を意識して言う。その鳴き声が機織る音に似るとされる。「促織不_レ成_レ_レ章」(白楽天「寓意詩五首」其三)(中略)などとあって、ここでは草中に鳴くので草を織ると詠んだものだろう。

(本間洋一『本朝無題詩全注釈二』)

とある。引用では島田忠臣、橘直幹の用例を中略したが、当詩の後世への影響が指摘されている。また、「^{イトヲユウムシハラム}絡糸怨虫」を詠む源経信の詩「^{ニシキヲオルハヤシ}絡糸^{ダンコウノホトリ}怨虫^{ソノリ}疎籬下織^{ニシキヲオルハヤシ}錦^{ダンコウノホトリ}林^{ダンコウノホトリ}翻^{ダンコウノホトリ}煖^{ダンコウノホトリ}閣^{ダンコウノホトリ}頭」(「九日即事」)でも、白詩の「^{ビシニヨス}寄微之十二韻」や「^{シヨカクトモニ}同諸客題于家公主旧宅」を踏まえ、「悲しげな音」を詠んでいると説明される^{注32)}。

そうであろうか。今一度、『白氏文集』^{注33)}に於ける「蟋蟀」(類語を含む)の用例を見たい。用例は、次表<表4>のとおりである。

<表4>『白氏文集』に於ける「蟋蟀」の用例

	用例
蟋蟀	(1) 野は秋にして蟋蟀鳴き、沙は冷ややかにして ^{ロジアツマ} 鷗 ^{シヨニカウル} 聚る。(「代書詩一百韻寄微之」巻第十三 0608) (2) 暗聲蟋蟀啼き、乾葉 ^{ゴトウ} 梧桐落つ。(「何處難忘 ^{サカワフスレガタキ} 酒七首其四」巻五十七 2759) (3) 蟋蟀啼きて相応じ、 ^{モンオウ} 鴛鴦宿りて孤ならず。(「南塘暝興」巻第六十五 3219)
促織	(4) 促織は章を成さず、提壺は但だ聲を聞くのみ。(「寓意詩五首其三」巻第二 0092)
蚕	(5) 寒を覚え ^{キョウ} 蚕 ^{メイ} 壁に近づき、 ^{メイ} 瞋 ^{メイ} を知りて鶴籠に帰る。(「秋晩」巻第五十三 2381)
絡糸	(6) 飢 ^ウ ゑて啼く春穀の鳥、寒くして怨

<p>む絡糸の虫。(「秋寄微之十二韻」巻第五十四 2427)</p> <p>(7) 布穀鳥は啼く桃李の院、絡糸虫は怨む鳳凰楼。(「同諸客題于家公主旧宅」巻第六十四 3098)</p>
<p>(8) 壁を遶る秋聲、虫糸を絡ぎ、簷に入る新影、月眉を低る。(「旧房」巻第十九 1249)</p>

「代書詩一百韻寄微之」(1)は、左遷された学友が目にする光景を想像したものである。都を離れた友の目に荒野に鳴く「蟋蟀」が映る。冷ややかな池に集まる水鳥とともに、荒寥とした心象風景の中で詠まれる。「其四」(2)では、霜の降りる夜、老病の我が身が蟋蟀の声を耳にする。「南塘暝興」(3)は、鳴き交わす蟋蟀やつがいの鴛鴦に、孤独な我が身が対比される。「秋晚」(5)では、寒気に伴い壁に近づく「蟄」が詠まれる。たしかに蟋蟀は、人生に照応するかのよ
うな秋の悲哀の景物として詠まれる。

「促織」や「絡糸」といった、機織りに関する詩語も用いられる。ただし、それらはすでに類型化した表現になっている。たとえば、上記の「促織は章を成さず」(4)は、日本の上代漢詩集『文華秀麗集』の同テーマである「絡緯無機」と比較する時、やはり異なる。上代漢詩が、さらに言葉を加え、あるいはまた、なぜそうなのかと見立てに言及するような詠み方をするのに対し、白詩は言及しない。

また、「絡糸」に関しても、白詩では「寒くして怨む」(秋寄微之十二韻)(6)、「虫は怨む」(同諸客題于家公主旧宅)(7)と、「怨」を詠む。白詩の詩情は、荒れた公主の宅への思いであったり、友と離れ一人都在仕事に明け暮れる我が身の淋しさであったりするものの、「虫」に関しては、それまでの蟋蟀の詩語で詠われてきた主たる詩想に等しい。虫が怨むのは、寒気の訪れであり、寒さである。「虫糸を絡ぎ」(旧房)(8)においても、壁に聞こえる虫の声が詠まれる。

「蟋蟀」に関する先行研究の捉え方は、日本の漢詩

が白詩の影響下にあるという一律的なものであり、類する用語も同義語として扱っている。しかし、上代詩以降、「蟋蟀」と「促織」を詩語として同義に捉え、作詩に用いていたようには見えない。

たとえば、先掲、源経信の詩「九日即事」(『本朝無題詩』巻五)は、たしかに「布穀・絡緯」を組み合わせ用い、白詩を典拠とする。しかし、その経信の

絡糸虫怨疎籬下 織錦林翻煖閣頭(「九日即事」)

には、「絡糸虫」と「織錦林」の対句に趣向が凝らされ、機織りの原義を残す。また、先掲釈蓮禪の用例は、

虫糸織草心機乱 雁陣結雲眼路遮(「野店秋興」)

である。「心機」は心の働きの意味とともに、織るための「機」が意図されているのではあるまいか。

日本古代の詩人が、「蟋蟀」ならびに「蟋蟀」にまつわる詩語に接し、「機織り」の側面に注目し、「促織、絡緯」の詩語を用いていたことは、第5章で述べた。『懷風藻』や『万葉集』にも機織りの比喩が見えたが、そういった見立ても作詩の素地となった。「蟋蟀」ならびに類義語、いわゆる「きりぎりす」の受容に関しては、日本独自の受容の仕方があった。

日本独自に弁別した「蟋蟀」の受容の仕方は、漢詩から和歌への過渡期、すなわち『古今集』前代の一時期の和歌に継承される。「漢風讚美時代」を経て再び和歌が公の場で詠まれるのであるが、その頃の「蟋蟀」に類する語を用いた和歌は、次のとおりである。

我のみやあはれとおもはむきりぎりす 鳴く夕かげのやまとなでしこ

(「寛平御時后宮歌合」80 素性)

あき風にほころびぬらむ藤ばかま つづりさせてふきりぎりす鳴く (「同」94 在原棟梁)

吾^ノ而^ミ已^ヤ哉 憐^ト砥^シ思 蝥^{ユウカゲノ} 鳴^メ暮^ノ景^ノ之 倭^{ヤマトナデシコ} 瞿^シ麦

(『新撰万葉集』89 秋歌三十六首)

秋^ニ風^{ホコロビヌ}丹^{ラシ} 綻^{ツヅリ} 沼^サ良^キ芝^{トテ} 藤^サ袴^キ 綴^サ刺^キ世^{トテ}砥^テ手 蝥^{トテ} 鳴

(『同』85 同上)

秋^ノ風^ノ之 吹^{スレ}立^バ沼^レ礼^バ者 蝥^{オノ} 己^{ガツツ}歟^{リト}綴^リ砥^テ 木^ノ之^ツ葉^ノ緒^ツ曾^ツ刺^ス

(『同』145 同上)

『新撰万葉集』85 と 145 は、先に述べた、機織りに関する見立てを歌の主意とする。それらは、「秋風」とともに詠まれ、秋の季節の本格的な到来を歌の背景とする。が、そこには、「蟋蟀」(蝥)が冬支度をするために機を織る、という趣向がある。『新撰万葉集注釈』では、同集の春の巻頭歌が「文織^{あやおりみだる}素」、夏の巻頭歌が「夏衣」で、いずれも布に関する歌であったことが指摘され、機織りは作歌のテーマとして関心の高かったことが窺える。

『和名抄』で項目の挙がる「はたおりめ」も、同時代の和歌に詠まれる。

雁^{ツル}がねは風^{カゼ}をさむみや^{はたおりめ}はたおりめ くだまく音^ネの
きりきりとする (『寛平御時后宮歌合』100)

「はたおりめ」の鳴き声を取り上げる希少な例である。中国の注釈書『古今注』で、「促織」の機織りの音と、紡績の糸を紡ぐ糸車の音の違いが区別されていたが、ここでは、その横糸を巻く「管」が詠まれる。管巻く音は高低音を発するという注釈を先に見た。陶器で出来た鈴の音のように、あるいは後世、打楽器の「鉦鼓^{シヨウゴ}」^{注34)}の音に比されるような鳴き声のコオロギ科の虫とは異なり、「ギーギー」という擦り合わせたような音で鳴くキリギリス科の虫の声であろうと推測する。

日本の『和名抄』は、「促織」を「はたおりめ」と解釈し、「絡緯」の翻案にもした。平安時代の虫の項目に、「はたおりめ」(『古今和歌六帖』)や「はたおり」(『枕草子』)が、「きりぎりす」とは別に挙がるのも、漢詩文の受容と無関係ではあるまい。「はたおりめ」は、

「蟋蟀」に端を発し、機織り(紡績を含む)に関連する詩語と生活実態とに鑑み、歌に採り入れられた歌語であったと考える。

中国漢詩の詩語「蟋蟀^{シツシュツ}」(類語を含む)から日本の詩歌が取り入れた詩想、歌想の主流は、やはり、後に白詩の影響を強く受けることになる、秋の悲哀であろう。その理解の上で、上記、詩から和歌への過渡期に、機織りに関する「蟋蟀」受容の一系統を認める時、いくつかの問題が解消されるように思う。

まず、「蟋蟀」より派生したであろう、「つづりさせ」の詞が、『古今集』以外の勅撰集には見えないという点である。「つづり」の語そのものは和歌に皆無ではない。

「蟋蟀」の機織りに関する側面を詠む、先掲「秋風にはほろびぬらしふちばかま つづりさせてふ蟋蟀なく」(『古今集』1020)の歌は、『古今集』では俳諧歌として置かれる。このことについて、片桐洋一『古今和歌集全評釈』では、「寛平御時后宮歌合」で披講された際に、「中国の故事を前提にして、見事に換骨奪胎」をなしとげたところの「思いがけない転換を俳諧と捉え」たためであり、「俗の世界での日常的な物言いを蟋蟀に言わせているゆえ」であろうと注釈される。

詩語を継承発展させたであろう、「つづりさせ」の詞が『古今集』では取り上げられ、その後消えていくのは、上記注釈のように、俗語的な性質と、機知を評価した古今歌風そのものの変遷もあろう。が、「きりぎりす・つづりさせ」の取り合わせが消えていくのは、「きりぎりす」の歌語が機織りに関する漢詩文受容の側面を失い、鳴き声を愛好される存在として、狭義になっていったからであろうと考える。

次に、キリギリスの用字に「蟋蟀^{シツシュツ}」に代わり「蝥^{キョウ}」が多用されるようになるという点である。厳密ではないが、傾向としては見える。歌語「きりぎりす」が白詩の影響を受けた、鳴き声を主流とする虫であると考えられたとき、『万葉集』の用字「蟋蟀(蟀)」に代わり、「蝥」が増えていくのではあるまいか。源順などの、平安朝の漢詩に於ける「蝥」も、同義語を「包括^{注35)}」した用字ではなく、実態と呼称との認識が定まり、鳴

き声を重視する虫の、狭義の用字になっていたからであろうと推測する。

さらに、「きりぎりす」を詠む歌に於ける、虫の鳴く時期の問題である。勅撰集には部立が為される。『古今集』では「きりぎりす」が初秋の景物として分類されているにもかかわらず、その後の勅撰集では晩秋の部立に取り入れられる^{注36)}という。それは、『古今集』前代の特殊な認識、すなわち「蟋蟀」の受容に、主流となる鳴き声と機織りに関する興趣とが併存していた時代の特殊な認識からであろう。機織りに関わる呼称を付された虫の鳴く時期は早い。『和名抄』に示されたような区分を「きりぎりす：蟋蟀」に反映させていたのが、『古今集』前代の、詩語ならびに歌語であった。

古代日本において、「蟋蟀」の詩語は、悲哀を伴う鳴き声を中心として受容された。しかし、一方で機織りと関連する見立ての興趣も積極的に受容した。中国から「蟋蟀」(類語を含む)が伝わり、平安時代初期の漢詩集が、「促織」「絡緯」「思虫」の語を用いていることは述べた。これは和歌にも継承される。まず「はたおりめ」という和語が「きりぎりす」と区別された。「きりぎりす」一語に於いても、実態の区別が為されていた。後に、漢詩同様に和歌でも、鳴き声を主流とする「きりぎりす」が残り、機織りに関する語との区別は、顧慮されなくなる。同じ「きりぎりす」という歌詞の中で弁別し存在していた実態は捨象され、鳴き声を愛好される「きりぎりす」が歌詞として残る。

先行研究では重視されない、そういった「蟋蟀」にまつわる詩語の受容の側面は、日本的な特色を呈している。不明確な対象をも詩歌の俎上に載せ、漢詩文の知識を広く類書によって得、呼称と実態の合わない詩語の中から、古代の詩人歌人は、機知を見い出していたといえよう。

7 結語

『奈良帝御集』の「きりぎりすつづりさせ」の一首に戻りたい。歌語としての「きりぎりす」は、中国漢詩文に詠まれた「蟋蟀」を受容した詞である。『奈良帝

御集』の「きりぎりす」は、傍流であるところの、機織りに関する受容の展開上にある。

「つづりさせ」を詠む当歌は、次の『詩経』唐風「蟋蟀」についての、晋の僖公に対する諷諭的解釈を意識して作られたものであろう。

蟋蟀は晋の僖公^キを刺^{ツシ}る。儉^{アツ}にして礼に中らず。故に是の詩を作^{アツレ}て、以て之を^{アツレ}関^{アツレ}む。其の時に及んで礼を以て自ら^{アツレ}虞^{アツレ}樂^{アツレ}せんを欲するなり。此れ晋なり。而るに之を唐と謂^{シタ}ふは、其風俗^{モトツ}に本^{モトツ}く。憂深く思遠く、儉にして礼を用^{スナフ}ふ。仍^{スナフ}ち堯の遺風有り。
(「唐蟋蟀詁訓傳第十 毛詩国風」^{注37)})

しかし、当歌は、「儉」を作者自らに関わりないものと詠み、聖帝が備える「礼」に寄せた歌にもしない。『古今集』の「つづりさせ」の歌がそうであったように、きりぎりすの鳴き声に意味を見い出し、いわゆる「見立て」による空想の世界である「あや」を主意とする。そこに、受容した中国漢詩文の、日本に於ける展開のさせかたが窺える。

以上のことから、当歌の「きりぎりす」は、まず、漢詩の影響を強く受けている歌詞であると解釈する。そして、その「きりぎりす」は、複数の類語を持つ「蟋蟀」の詩語を日本独自の捉え方で受容した、上代ならびに平安時代初期の詩歌の特色を有していると考えられる。

注

- 1) 鬼塚厚子「合綴本『奈良御集』考—『代々御集』編輯への一階梯—」に拠る。久曾神昇「奈良天皇御集」解題には、その成立を『拾遺集』成立以前の「天慶六年七月以降長徳頃まで」、橋本不美男「奈良帝解題」では、宮内庁書陵部本の用字から「底本自体は近世初期の書写ではあるが、その親本は相当古い。推定すれば平安朝期の書写本」かとされる。一方で、古風な用字法は意図的なものとする見方もあり(片桐洋一「奈良御集 解題」、書写は「鎌倉時代後期と推定される書写時に由来すると見るほかはない」という。近年の笹川博司「奈良御集 仁和御集 寛平御集」『解説』では、上記、時雨亭文庫蔵本の「奈良御集 解題」を承け、11世紀初頭『拾遺集』と同時期に編集されたもの」とされる。
- 2) 『古今和歌集成立論 資料編 下』に拠ると、伊達家

旧蔵本『古今和歌集』のみ漢字表記が為されている。同書を底本にする『新編国歌大観』での表記の用例数は、「蟋蟀 2、蚕 1、きりぎりす 3」である。

- 3) 以下、作品の成立年で、とくに断らない場合は、『日本古典文学大辞典』(岩波書店)に拠る。
- 4) 橋正一、「「キリギリス」と「コホロギ」他
- 5) 柳澤良一、「きりぎりす考一虫の文化史の試み一」
- 6) 「どの歌にも、寒い秋の夕方から夜にかけて、庭草の陰や床の周辺で鳴き、しみじみとした秋の情趣を感じさせるもの、と詠まれている。平安時代の「きりぎりす」と基本的には変わらない詠み方といえる。」(「同上論」、p.16)という。
- 7) 小島憲之、『古今集以前一詩と歌の交流一』、p.10
- 8) 注記で断る以外は、川上富吉、「コホロギはキリギリス一萬葉集「蟋蟀・蟋」考一」の本文を使用した。
- 9) 「唐風」、『漢詩大系 詩経 上』
- 10) 集傳、「毛詩卷八 豳風七月」、『漢文大系』
- 11) 「豳風」、『漢詩大系 詩経 上』
- 12) 書き下し文は『新釈漢文大系 文選』を参考にした。
- 13) 「雑詩上 古詩十九首」、『新釈漢文大系 文選(詩篇) 下』
- 14) 「九辨五首」、『新釈漢文大系 文選(文章篇) 上』
- 15) 「雑詩上 古詩十九首」、『新釈漢文大系 文選(詩篇) 下』
- 16) 同上書
- 17) 「唐風」、『漢詩大系 詩経上』
- 18) 川上富吉、「コホロギはキリギリス一萬葉集「蟋蟀・蟋」考一」
- 19) 以下『玉台新詠』については、空白、旧字を除き、『新釈漢文体系 玉台新詠』の書き下し文を用いた。
- 20) 「倭名類聚鈔卷十九」、『倭名類聚抄 十』(外題)・『倭名類聚鈔 20 巻』
- 21) 以下『東雅』を私に口語訳している。
- 22) 最初に伝来した 15 巻本を 30 巻に増補したのは日本人の可能性が高いという。
- 23) 国書説に対する批判もある。(松本信道、「『文字集略』国書説批判」)。
- 24) 小島憲之、「第一章 詩と歌の接するところ 三 上代びとの歌」、『古今集以前一詩と歌の交流一』、p.85・p.86
- 25) 以下『校註日本文学大系』所収「凌雲集」のテキストを用い、一部旧字を改め、私に書き下した。
- 26) 以下『日本古典文学大系』所収「文華秀麗集」の本文と書き下し文、同書の詩番号を用いた。
- 27) 以下『校註日本文学大系』所収「経国集」のテキストを用い、一部旧字を改め、私に書き下した。
- 28) 小島憲之、「第二章 漢風讚美時代 四 漢風の表現」、『古今集以前一詩と歌の交流一』、p.154
- 29) 『大日本文徳天皇実録』仁寿元年(851年)9月26日の記事に拠る。『古今集以前』では、「白詩の伝来はその時に応じてそれぞれ形態を異にするものが将来さ

れたとみるべき」であるが、「承和期を中心とする白詩の伝来をみる」(p.178・p.179)という。

- 30) 小島憲之、『古今集以前一詩と歌の交流一』、p.158
- 31) 以下、本間洋一『本朝無題詩 全注釈 一』・『同 全注釈 二』を参照した。算用数字は、同書の詩番号である。
- 32) 柳澤良一、「きりぎりす考一虫の文化史の試み一」、p.21
- 33) 以下『新釈漢文大系』「白氏文集」の書き下し文を参照した。一部旧字を新字に改め、茲編に鳥字は「鷺」に代えた。算用数字は同書の詩番号である。
- 34) 『梁塵秘抄』卷二 392
- 35) 柳澤良一、「きりぎりす考一虫の文化史の試み一」、p.21
- 36) 「きりぎりす」を詠んだ歌が秋の部のどの辺りに配置されているかについて、小林祥次郎「きりぎりす(付)くつわむしー古典文学歳時記のうちー」では、二十一代集のうち、『千載集』以降の勅撰集が、秋の後半のものにするという。(p.60)
- 37) 『漢文大系 第十二巻』所収「毛詩」の訓点を参照して書き下し、読み仮名を付し、古字を「深」に改めた。

引用文献

- 1) 「奈良帝御集」、『新編国歌大観 第七巻』、角川書店、1989
- 2) 「古今和歌集」、『同上書 第一巻』、同上、1983
- 3) 「万葉集」・「新撰万葉集」、『同上書 第二巻』、同上、1984
- 4) 「寛平御時后宮歌合」、『同上書 第五巻』、同上、1987
- 5) 「家持集」、『同上書 第三巻』、同上、1985
- 6) 川口久雄・志田延義、『日本古典文学大系 73 和漢朗詠集・梁塵秘抄』、岩波書店、1965
- 7) 『日本古典文学大辞典』、岩波書店、1983-1985
- 8) 久曾神昇、「八代御集解題 一 奈良天皇御集」、『八代列聖御集』、文明社、1940
- 9) 橋本不美男、「奈良帝解題」、『私家集大成 第1巻 中古1』、明治書院、1973
- 10) 片桐洋一、「解題」・「奈良御集・仁和御集・寛平御集」、『冷泉家時雨亭叢書 第二十二巻 平安私家集 九』、朝日新聞社、2002
- 11) 久曾神昇、『古今和歌集成立論 資料編 下』、風間書房、1960
- 12) 片桐洋一、『古今和歌集全評釈(下)』、講談社、1998
- 13) 「袖中抄」、『日本歌学大系 別巻二』、風間書房、1992(第6版)
- 14) 新井白石編 大槻如電校、『東雅 20 巻目 1 巻 4(巻之17-20)』、吉川半七、1903
- 15) 「懷風藻・凌雲集・文華秀麗集・経国集・本朝統文粹」、『校註日本文学大系 第二十四巻』、国民図書、1927
- 16) 小島憲之校注、『日本古典文学大系 69 懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』、岩波書店、1964

- 17) 新撰万葉集研究会編、『新撰万葉集注釈 卷上(二)』、和泉書院、2006
- 18) 本間洋一、『本朝無題詩 全注釈 一』、新典社、1992
- 19) 同、『同 全注釈 二』、同、1993
- 20) 『倭名類聚鈔 20 卷』、那波道圓、1617
- 21) 高田眞治、『漢詩大系 第一卷 詩經 上』、集英社、1972 (第5版)
- 22) 星野恆校訂、『漢文大系 第十二卷 毛詩・尚書』、富山房、1975年(増補版)
- 23) 内田泉之助・網祐次、『新釈漢文大系 第15卷 文選(詩篇) 下』、明治書院、1966(再版)
- 24) 原田種成、『新釈漢文大系 第82卷 文選(文章篇) 上』、明治書院、1994
- 25) 内田泉之助、『新釈漢文体系 第60卷 玉台新詠 上』、明治書院、1994(第11版)
- 26) 同、『同 第61卷 玉台新詠 下』同、1993(第11版)
- 27) 岡村繁、『新釈漢文大系 第97卷 白氏文集 一』、明治書院、2017
- 28) 同、『同 第99卷 白氏文集 三』、同、1988
- 29) 同、『同 第100卷 白氏文集 四』、同、1990
- 30) 同、『同 第105卷 白氏文集 九』、同、2005
- 31) 同、『同 第106卷 白氏文集 十』、同、2014
- 32) 同、『同 第107卷 白氏文集 十一』、同、2015
- 33) 鬼塚厚子、「合綴本『奈良御集』考—『代々御集』編輯への一階梯—」、『源氏物語の内と外』、風間書房、1987
- 34) 笹川博司、「奈良御集・仁和御集・寛平御集全釈」、『私家集全釈叢書 41』、風間書房、2020
- 35) 橋正一、「「キリギリス」と「コホロギ」」、『国語と国文学』、12(2)、東京帝国大学国文学研究室、1935、pp.55-67
- 36) 柳澤良一、「きりぎりす考—虫の文化史の試み—」、『同上書』、74(11)、東京大学国語国文学会、1997、pp.12-24
- 37) 小島憲之、『古今集以前—詩と歌の交流—』、塙書房、1976
- 38) 川上富吉、「コホロギはキリギリス—萬葉集「蟋蟀・蟋」考—」、『大妻国文』、(29)、1998、pp.1-24
- 39) 加納喜光、「詩經の博物学的研究(2)—虫の博物誌(承前)」、『茨城大学人文学部紀要 人文学科論集』、16、1983、pp.71-98
- 40) 松本信道、「『文字集略』国書説批判」、『駒澤大学文学部研究紀要』、48、1990、pp.217-237
- 41) 林忠鵬、「『倭名類聚抄』所引『兼名苑』について」、『和漢比較文学』、(27)、和漢比較文学会、2001、pp.51-61